

上代語「とかま」について

— 古事記歌謡「久方の天の香具山とかまにさ渡る鶺鴒」の言語イメージを中心に —

和田 明 美

はじめに

古事記二七番・二八番歌謡は、倭建と尾張の美夜受媛

との成婚にまつわる歌謡として知られている。

ひさかたの 天の香具山

斗迦麻邇 佐和多流久毘

弱細 手弱腕を

枕かむとは 我はすれど

さ寝むとは 我は思へど

汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

(二七番歌謡)

高光る 日の御子

やすみしし 我が大君

あらたまの 年が來經れば

あらたまの 月は來經往く

諾な諾な諾な 君待ち難に

我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ

(二八番歌謡)

〈日本古典文学大系「古事記」〉

二七番歌謡は「婚ひせむと思ほししかども亦還り上らむ時に婚ひせむと思ほして、期り定めて東の国に幸でまし」た倭建が、「尾張の国に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比賣の許に入り坐し」た時に詠みかけた歌謡である。しかも倭建に大御酒盞を捧げ献るここでの美夜受媛は、「意須比の裾に月経著きたりき」という状況にあり、「故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく」に続くのが、この歌謡なのである。二八番歌謡は、美夜受媛がそれに答えたものとされている。

また「尾張国熱田太神宮縁記」にもこれに類する歌謡

が、「為此風俗歌矣」との説明のもとに収められている。

。麻蘇義。乎波理乃夜麻止。許知其知能。夜麻乃加比由。等美和多流。毘何波乃波富曾。多和夜何比那

乎。麻岐彌牟等。和例波母弊流乎。與利彌牟止。和例波母弊流乎。和伎毛古。那何祁西流。意須比乃宇閉爾。阿佐都紀乃其止久。都紀多知爾祁理。

。夜須美志々。和期意富岐美。多伽比加流。比乃美古。阿良多麻乃。岐閉由久止志乎。止志比佐爾。美古麻知何多爾。都紀加佐爾。妓美麻知何多爾。宇倍那宇倍那志母夜。和何祁勢流。意須比乃宇閉爾。阿佐都紀乃其止久。都紀多知爾祁流。

〈群書類從 卷第廿四〉

さて、これらの歌謡については、契沖の「厚顔抄」をはじめとして、宣長の「古事記伝」以来種々の解し方がなされてきた。二八番歌謡の結びの「我が著せる襲の裾に、月立たなむよ」の表記や解釈の問題もさることながら、二七番歌謡「ひさかたの天の香具山、とかまにさ渡る鶉」の「とかま」をめぐることは、後述するように、いくつかの説が出されている。

しかしながら、それらを「ひは細たわや腕」の、繊細でたおやかな美夜受媛を具象化する序として理解しようとする時、いずれの説も、美夜受媛造型に効果的であるよりは、かえって調和しあわない要素を私達に看取させ

るのである。

そこで今回は、古代日本語「とかま」に焦点を置きながら、二七番歌謡の「ひさかたの天の香具山 とかまにさわたる鶉」の表現によって描き出される、言語イメージを探ってみようと思う。

一、「斗迦麻邇佐和多流久毘」に関する諸説

〈表1〉

斗迦麻	久毘	注 釈 書 類
① 利鎌	杵	<ul style="list-style-type: none"> 厚顔抄(契沖) 古事記和歌略注(賀茂真淵) 古事記伝(本居宣長) 稜威言別(橋守部) 古事記新講(次田潤) 古事記評釈(中島悦次)
② 鋭鎌 <small>(一筋のさ渡る様を襲えんとする)</small>	鶉	<ul style="list-style-type: none"> 記紀歌謡集全講(武田祐吉) 古事記大成(倉野憲司) 日本古典文学大系古事記(倉野・武田) 記紀歌謡全注解(相磯貞三) 日本古典全書古事記(神田・太田) 古事記全講(尾崎暢狭) 記紀歌謡評釈(山路平四郎) 日本白鳥文学全集古事記(荻原 鴻巣) 古事記全註釈(倉野憲司)

③	銳器に	鶴
<p>。立命館文学65号「古事記の「ひさかたの天の香具山」の歌謡」(宮嶋弘)</p> <p>。日本古典文学大系古代歌謡集(土橋寛)</p> <p>。古代歌謡全注釈(同右)</p> <p>。鑑賞日本古典文学古事記(上田・井手)</p> <p>。新潮日本古典集成古事記(西宮一民)</p> <p>。古事記歌謡全訳注(大久保正)</p> <p>。日本思想大系古事記(石母田・小林・佐伯)</p>		

この二句に関する従来の説は、へ表1へに示したように三種に大別される。

①は、今日ではほとんど顧みられていないが、「斗迦麻」を「利鎌」とし、「久毘」を「杙」とする説である。「古事記伝」には「此二句は、鎌に拂て刈らるばかりの、細木の木立と云るにて、是までは次句の序なり」とある。

②は、「斗迦麻邇」を久毘(鶴)のさ渡る様の比喻表現と見なす説である。「日本古典全書」を例にとるならば、「鋭い鎌のやうに、鋭角的な感じで大空を翔って行く白鳥。」となっている。ただし、「記紀歌謡集全講」「日本古典文学全集」「古事記全註釈」等は、次のように「久

毘」に「首」を懸ける解釈を施している。——「するどい鎌のやうにおしわたる鶴。その頸のよくな」へ「記紀歌謡集全講」へ「鋭い鎌でさつと物を切るように(さつと)飛んで行く白鳥(その首のように)へ「古事記全注釈」へ。

③は、「斗迦麻邇」を、「銳器に」の意とする宮嶋氏の見解へ「立命館文学」六五号へに従っている説である。例えば「古代歌謡全注釈」では「鋭くやかましく鳴きながら飛んでゆく鶴」となっている。しかし、宮嶋氏が「鶴」に「首」を懸けて「純白清浄な此の鳥、わけても其の長い頸から若い女性のひはぼそたわやかひなを聯想するのは、巧みなものと謂はねばならぬ」と説かれるのに対し、土橋氏は「『鶴』と『首』の両方の意に働かせることは無理」へ「日本古典文学大系古代歌謡集」へ「と言い、「天の香具山を飛んでゆく鶴の姿として誰の目にも浮かぶのは、頸ではなくて、両翼をしながら飛ぶ姿ではあるまいか」へ「古代歌謡全注釈」へと力説しておられる。

ところで「久毘」については、既に宣長が自説に対して疑義を挟み、これを「鶴」とする見解を書き添えているのである。「古事記伝」によると、この歌謡の表記が清音の「杙」とは異なる濁音「ピ」によって「久毘」と書き表わされていること。また「佐和多流」も鳥、月、

谷巖等が「みな渡行ことにのみ云る」ことを説いた上で、「熱田太神宮縁記」を参考に、「斗迦麻迦 佐和多流久毘」がこの縁記の「彼此之山之峽に眞渡る 鶉之類」の四句と、同様の事柄の表現であることを指摘している。宮嶋氏も前掲の論文の中で、「久毘は確かに鶉である」とされ「オホハクテウとするのが良いと考へる」(P 37)と述べておられる。近年の注釈書や辞書はこれを採用し、「久毘」が白鳥の古名であることは、ほぼ定説とされている。尚「天治本新撰字鏡」(巻六一四八二)によると「鶉」に「久比」の訓が見られ、「享和本新撰字鏡」ではこれが「久々比・又古比」となっている。これまでにも言われてきたように、神楽歌の「湊田に 久々比や八つ居り」(五四)や風俗歌の「彼の行くは 雁か久々比か」(二五)と、ここでの「久毘」は恐らく同じものと考えられる。

「佐和多流久毘」が定説を得ているのに対し、「斗迦麻」に関しては、今日の主な辞書も、注釈書と同様二つの見解に分れている。当該歌謡を例に引く「時代別国語大辞典上代編」「日本国語大辞典」「小学館古語大辞典」等は、「鋭利な鎌」としているのであるが、「岩波古語辞典」は「鋭くやかましいさま」とする立場をとっているのである。その中で最も新しい「小学館古語大辞典」

には、「鋭い鎌のように飛んでいく意とみる説があるが、比喩としてびったりしない。もともとうるさい意の形容詞に『かまし(鶉)し』があったから(中略)鋭くやかましくの意と解する説がよい」(山口佳紀氏)といった説明がほどこされている。

では、「とかまに」は「鋭鎌に」か「鋭器に」のどちらかの意なのであろうか。この表現が「ひは細たわや腕」を導く序であることを考え合せらるれば、両説いずれに對しても、次のような疑問が挟まれる。即ち、ここでの白鳥が、「かまびすしく」「騒がしく」鳴いて飛び渡っているのであると、「ひは細たわや腕」の表現との間に、共通のイメージを見出すことは難しい。かと言って鋭い鎌のイメージを重ねて、「鋭角的に」あるいは「さつと」飛び渡るといっても定着しない。「ひは細たわや腕」と形容される美夜受媛は、少くともとぎすまされた鋭さや、騒然たる性質・容姿を具えていることはないはずである。むしろ繊細でたおやかな美しさを、この表現は表わしているのであろう。「ひさかたの 天の香具山とかまに さ渡る鶉」は、そういった美しさを具象化する序であることに、まず留意する必要があるように思われる。

二 「とかまに」についての検討

そこで、「に」の表現機能に着目し、その上で、「とかま」が何を表わす語であるのかを探ってみたい。

〈表2〉は、古代歌謡を考える場合に参考となる資料の内、「さ渡る」「渡る」の見られる文献について、その用例数を示したものである。

〈表2〉

例	さわたる		わたる	
	総数	「に」を伴う例	総数	「に」を伴う例
作品				
記紀歌謡	1	1	5	-
風土記歌謡	-	-	2	2
万葉集	6	2	196	64
神楽歌	-	-	1	1
風俗歌	2	-	2	1
				(1)

〈表3〉は当該歌謡と同じく、「に」を上接する「渡る」について、構文上、そこにどのような規則性が働いているのかを知ろうとする観点から、まとめたものである。

〈表3〉

例	場所	時間	人物	比喻	その他	計
記紀歌謡	-	-	-	-	-	-
風土記歌謡	2	-	-	-	-	2

	万葉集	神楽歌	風俗歌
さ渡る	27 (9)	1 (1)	1
渡る	15 (5)	-	-
合計	9	4	9
伴う例	4	1	1

※()内は、鳥が動作の主体となっているものの用例数を示す。
※「さ渡る」は当該歌謡を除くと「時間」「場所」各1例となっている。

○場所を認定する「に」の例

①高山にたかべき渡り(左渡)高高にわが待つ君を待ち出でむかも (万十一一二八〇四)

②妹に戀ひ吾の松原見渡せば潮干の瀧に鶴鳴き渡る(渡)

(同六一一〇三〇)

③山の際に渡る(渡)秋沙のゆきて居むその川の瀬に波立つなゆめ (同七一一一二二二)

④瀧の上の三船の山ゆ秋津辺に来鳴き渡る(渡)は誰呼兒鳥 (同九一七一一三)

⑤難波瀧潮満ちくれば海人衣 海人衣田裏の島に鶴立ちわたる (和太留) (神楽歌一三七)

○時間を認定する「に」の例

⑥物思ふと寝ねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡る(左渡)為方なきままでに (万十一一九六〇)

⊕家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴きわたる(度)
(同七―一六二)

⊖獨り居ても思ふ夕に霍公鳥此間鳴き渡る(度)心
しあるらし
(同八―一四七六)

⊖秋風の清きゆふべに天の河舟漕ぎ渡る(度)月人壯人
(同十一―二〇四三)

○人物を認定する「に」の例

⊖吾妹子に戀ひし渡れば(度)剣刀名の惜しげくも思ひ
かねつも
(同十一―二四九九)

⊕紫の帯の結びも解きも見ずもとなや妹に戀ひ渡りな
む(度)
(同十二―二九七四)

○比喻表現を成立させる「に」の例

⊖さにつらふ妹をおもふと霞立つ春日も暗に戀ひ渡る
かも(度)
(同十一―一九一一)

⊖相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち
渡る(度)
(同十三―三三三三)

○その他の例

⊖葉根蘊今する妹を夢に見て情のうちに戀ひ渡る(度)
かも
(同四―七〇五)

⊖朝霜の消ぬべくのみや時無しに思ひ渡らむ(度)息の
緒にして
(同十二―三〇四五)

⊖筑波嶺にかか鳴く鶯の音のみをか鳴き渡りなむ(和
多里)逢ふとは無しに
(同十四―三三三九〇)

へ表3へからも知られる通り、格助詞「に」の認定す
るものは場所が最も多く、次いで時間、人物となってい
る。しかし用例にも挙げたように人物を認定する「に」
の例は、すべて「恋ひ渡る」作用においてのみ用いられ
ている。ここで特に示唆的であるのは、鳥が動作の主体
である場合に格助詞「に」によって認定されるのが、場
所か時間に限られている事実である。用例が少ないので
表には示さなかったが、このことは、「さ渡る」の例の
⊖についても当てはまる。すると、白鳥の古名とされる
鶴が動作の主体であるこの歌謡においても、その点への
配慮が必要になる。換言すれば、「とかま」は、鶴のさ
渡る「場所」か「時間」のどちらかの表現にあずかって
いるのではないかと推定されるのである。

さらに「さ渡る」「渡る」の用例の検討によって、次
のような理由からも従来の説には従い難いことが知られ
たのである。まず第一に、「に」を伴う用例に関する限
り、連用修飾句となつて下にかかつていく例は一例も見

られない。そのような場合には、例㊦のように副詞や形容詞が用いられている。

㊦よく度る(好度)人は年にもありとふを何時の間にもわが戀ひにける
(万四一五二三)

㊧海原を遠く渡りて(等保久和多里弓)年経とも兒らが結べる紐解くなゆめ
(同二〇一四三三四)

もしも「鋭くやかましく」飛び渡ることを表わすとするれば、「鋭鬣に」ではなく「かましく」のような別の表現が用いられたのではないかと思われる。

第二に、「に」が比喻表現を成立させる諸例は、㊨の「霞立つ春日も暗に戀ひ渡る」や㊩の「白木綿花に波立ち渡る」からも明らかのように、それをより象徴的に表わすものになぞらえる手法なのである。「とかまに」がこれらと同じ比喻表現であるならば、鋭利な鎌の持つ鋭さや形がイメージ化されることになる。しかし「ひは細たわや腕」の序として、それでは調和しないのである。

従って、「とかま」は鶴のさ渡る場所か時のいずれかを表わす、とする私見がここに残されることになる。この点を考える上に手掛りとなるのは次の事柄である。その一つは、「ひさかたの天の香具山とかまにさ渡る鶴」までが、この歌謡の中で一つの纏まりを成していることであり、他の一つは、この贈答歌謡が天上の月を媒介

にして構築されていることである。

この歌謡において、「ひさかたの天の香具山」が何を意味しているのかについても、しばし問題にされてきた。しかし、どの注釈書にも、そのことへの適切な説明は見うけられない。例えば倉野憲司氏は、「古事記全註釈」の中で、「尾張での歌に大和の天の香具山が出て来るのはしっくりしない。」と述べておられる。けれども、古代の人々にとって、香具山は、単に大和の地にある山の一つではなかったのである。

㊨天降りつく 天の芳来山 霞立つ 春に至れば 松
風に 池波立ちてへ下略
(万三一二五七)

㊩倭に天の加具山あり。天より天降りし時、二つに分れて、片端は倭の國に天降り、片端は此の土に天降りき。
(伊与国風土記逸文)

㊪ソノ山のクダケテ、大和国ニフリツキタルヲ アマノカゲ山トイフ
(阿波国風土記逸文)

各地にこのような「天降り」伝説を残している所からも、香具山に寄せた、当時の人々の崇敬の念の程が窺われる。思うに、尾張を舞台とする歌謡の中に、「天の香具山」が詠みこまれたのは、

㊫み熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へど直にあはぬ
かも
(万四一四九六)

⊗伊勢の海の磯もとどろに寄する波恐き人に戀ひわたるかも
(万四一六〇〇)

における「み熊野」や「伊勢」と同様の表現効果を期待してのことではないだろうか。神の鎮座する神聖な土地を、序の中に詠みこむことによって、歌の背後に一つのイメージが付与されることになる。即ち、⊙の主体が心に思う女性を、神聖な美しさを具えた女性として描き、また⊗の「かしこき人」に対する畏敬の念を、より鮮明にさせる効果を果たしているのが、ここでの「み熊野」や「伊勢」の表現と言える。

「ひさかたの天の香具山」も、⊙⊗と同様に考えることはできないのであろうか。神聖な天の香具山を序とすることに、美夜受媛は、神秘的な美しさを具えた女性としての、人物造型を得ることになる。また古代日本語においては、格助詞は用いられないことが多い。特に動詞「渡る」の上に、地名や場所を表わす語がある場合には、左記の例⊙のからも知られるように、それが渡る対象を表わしていることは、自ずから理解されたのである。

⊙山越えて海渡るとも(干瀰倭極留)おもしろき今城の
中は忘らゆましじ
(紀歌謡一一九)

⊗佐保渡り(佐徳度)吾家の上に鳴く鳥の聲なつかしき

愛しき妻の兒

(万四一六六三)

従って、この序の構文は「ひさかたの天の香具山」を、鶉が「とかま」にさ渡るということになる。序の一部を形成する「天の香具山」を以上のように考えるならば、尾張の国の歌謡に、大和の香具山が詠まれたことへの説明もつく。前掲の「熱田太神宮縁記」において、これが「尾張のやまと」に変えられているのは、縁記作成の当時には、この歌謡の「天の香具山」の表現性が、理解されなくなっていたことによるのであろう。

次いで、この歌謡が月を媒介にしている点にふれようと思う。「古事記」本文には「故其の月経を見て御歌曰みたまひしく」とあるが、贈歌の「月立ちにけり」は、答歌の「月は來經ゆく」「月立たなむよ」との関係からしても、宣長が指摘したように、天に輝く月をそこに重ね合せていると考えられる。つまり、両者の贈答は、天の香具山を舞台に、天上の月をその横糸として、詩的空間を作り上げている、と言えば当を得ているのかもしれない。しかも二七番歌謡の結びの「月立つ」の表現は、天界の月に關して使われる時には、

⊙月立ちてただ三日月の眉根掻き日長く戀ひし君に逢
へるかも
(万六一九九三)

からも明らかのように、新月である「三日月」が立ち登

る場合に、用いられる表現なのである。

以上の二点を念頭に置いて、「とかま」の問題に戻ることにしよう。語の構成からしても、恐らくこれは時を表わす語ではないと思われる。ある鳥がある地点へ渡ることを、格助詞「に」を伴って表現する場合には、例④「朝明に」、⑤⑥「ゆふべに」、⑦「よひに」のような表現が使用されている。この歌謡に、鶺鴒のさ渡る時が詠まれるとすれば、「月立ちにけり」との関係からしても、夕暮時を表わす表現によつたであろう。「とかま」が時を表示する語でないとすると、必然的にこれは、何らかの場所を表わしているということになる。それは一体何なのであろうか。既述のように、これらの歌謡は、月を織りこみながら、その縁語をも巧みに用いて、展開されている。また「月立ちにけり」の結びも、神聖な天の香具山に新月が立ち登つたことを確認し、その事のなりゆきを凝視的に見守る表現となつてゐる。それらを捭り所とするならば、「とかま」も新月と関係のある語ではないかと予測される。

ところで、古代の人々は、満ち欠けしながら移り変わる月を、どのように呼び習わしていたのであろうか。古代語には、抽象概念を表示する語が少なく、その反面、具体的な物象や、具体的概念を表わす語に富んでいたで

あろうことは、近年の文化人類学(注9)の研究成果からも推察される。また、小島憲之氏も「上代日本文学と中国文学」上において、「眼前(注10)にある手近なものによつた」とえる「原始的思考の概念作用について論じておられる。恐らく、「新月」「満月」等は、漢語が輸入されてから後の語であらうし、「三日月」「十三夜」「十五夜」「十六夜」等の数の概念によつて捉える表現も、日本語の歴史からすれば、比較的新しいのではないだろうか。満ち欠けしながらその形を変える月が、古代人の生活に、深く関与していたことを考えてみても、それ以前の古代語に、個別的な月の名称がなかったとは考えにくい。その場合、それぞれの月を、自らの生活と密接に関わりあう具体物になぞらえて、呼び習わしていたのではないだろうか。「弓張(ゆみぢ)」や「弓張月」の名は、そのなごりの一つとして中古・中世の文献にも残されており、特に「大和物語」に見られる次のような例は、この語が実際にも使用されていたことを、私達に教えてくれるのである。

② 同(飛脚)じ帝の御時躬恆をめしてへ中略「月を弓張といふは何の心ぞ。其のよしつかうまつれ」とおはせたまうければ

(一三三段)

農耕生活には欠かせない彎状の鎌も、同じように、新月の形をしている。「古事記」編纂當時には、必需品とさ

れていたであろう鉄製の鎌と、三日月との間に共通性を認め、それを「とかま」の月と言ったとしても不自然ではあるまい。

それでは、実際に研いだ鎌をもって新月を表わしたという記録は、文献には残されていないのであろうか。確かに、上代語を知りうる文献の中に、それを見い出すことはできない。しかし、次のような資料は、そういう把握の仕方がありうることの傍証として挙げられる。

。「書言字考節用集」(二一)乾坤・時候二一P20)

拙……磨鎌(注12) 杜甫ノ詩。新月似磨鎌。

。「和漢三才圖會」(一一)天部P5)

拙……則其形如懸弓、或如鎌也

。「漢詩大觀」(韓昌黎詩集卷七一)晚寄張十八助教

周郎博士)

日薄風景曠。出婦偃前簪。晴雲如擘絮。新月似磨鎌。

田野興偶動。へ下略

これらの資料から、古代日本語にも、漢語「磨鎌」に相当する「とかま」の語が、新月を称する語として存在していた、と推定することは許されるであろう。記紀歌謡との類似性や影響が説かれている唐代以前の漢文学「詩經」「楚辭」や「漢書」「後漢書」類書類はもちろん「文選」「玉台新詠」にはその例を見ない。従って

漢文学の影響を受けた表現と見るよりは、農耕文化の生み出した独自の上代語と見る方が妥当かもしれない。いずれにしろ「とかま」は、彎状の鎌のイメージをもって、新月のさやかな光と形を具象化する語ではないかと思われる。この語の存在は、「延喜式祝詞」の中の「彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以打掃事之如々」(六月晦大赦)によっても確認される。「と」十名詞「鎌」かなるこの語は、

① 鎌子に直に逢はむと我が裂ける利目(斗米)

(記歌謡一六)

② 朝夕に哭のみし泣けば焼大刀の利心(刀其己呂)も吾は思ひかねつも (万二〇一四四七九)

の「と目」「と心」と同じ語構成となっている。形容詞「とし」や動詞「とぐ」の「と」と同様(注15)に、これも、不純な要素やそのものの働きを妨げる要素が一切とり除かれ、本来の資質や機能が余すところなく発現・發揮された状態を表わす意義的単位と考えられる。従って「と鎌」の「と」も、研ぎ磨かれることを通して、白く輝く光沢の美しさを増した鎌を、形容する語ということになり、さやかな光を放って輝く彎状の新月のイメージと合致するのである。

天降り伝説を持つ天の香具山に輝く月を、その媒介としながら、展開されているこれらの歌謡は、以上の考察を通して、次のような結論に至る。即ち、「ひさかたの天の香具山」は、単なる地名を表わすのではなく、これが序の一部であることによって、美夜受媛の美しさに、神秘性を帯びさせる効果を果たしている。さらに「とかまにさ渡る鶴」の「とかまに」は、飛び渡る鶴の様を、鋭い鎌のようにと譬えているのでも、鋭くやかましくと形容する表現でもなく、それは、鶴のさ渡る場所＝新月を表わしていると考えられる。そう解するならば、結びの「月立ちにけり」もこの「とかま」と照応することになり、何より、鶴の渡っていく目的地が天界の月であることよって、歌謡全体に幻想的な雰囲気醸し出されることになる。従来どの説によるよりも、少なくとも「ひは細たわや腕」を導く序として、定着するのではないだろうか。

香具山にさやかな光を放って輝くとかまの月(新月)を目ざして渡っていく、幻想的な光景が、まず序において描出される。あたかも「天をとめ」の昇天を思わせるこのイメージは、そのまま「ひは細たわや腕」の表現へと流れこむことになるのである。要するにここでの序は、白鳥の持つ清浄さと、香具山の上に輝く新月の表現効果とが相俟って、純白で神秘的な美しさを具えた美夜受媛を造型化する上に、見過すことのできない役割を果たしていると言えよう。これを受けた答歌の結句「月立たなむよ」の問題については、稿を改めることにしたい。

〔注〕

- 1 「日本書紀」には、「日本武尊、更尾張に還りまして、即ち尾張氏の女宮寶を娶りて、淹しく留りて月を踰ぬ」(景行天皇四十年)とのみある。
- 2 「古事記の『ひさかたの天の香具山』の論考の中で、宮嶋弘氏は、「とかまに」を「鋭鷲に」の意とする、それまでにはない見解を出された。
- 3 この「クビ」が「クゲヒ」の約であるのか、誤字であるのかは定かでない。なお、「倭名類聚鈔」にも「鶴」に「古布」「久々比」の訓が見られ、「大鳥也」とある。また「観智院本類聚名義抄」では「ク

グヒ」と濁音表記になっている。

4 「仏足石歌」「続日本紀歌謡」「琴歌譜」及び「催馬楽」「東遊歌」「雑歌」には用例が見られない。

5 日本語においては、複合語の語性が下接語によって決定されるという法則性が見られるので、「恋ひ渡る」「思ひ渡る」のような心理的作用を表わす「渡る」の例も、「鳴き渡る」「飛び渡る」と同様に検討の対象とした。

6 「万葉歌人の研究」(山崎良幸著)によると、「み熊野の浦の浜木綿百重なす」は、「神秘的な美の象徴」とされている。(P.97)

7 「古事記伝」には「婦人の月水は、月々にめぐりて出る物なる故に、其が着て見えたるを、天に月の出たるに比へて、如此云なし給へるなり」とある。

8 「日本語の文法機能に関する体系的研究」(山崎良幸著)第四章第一五節助動詞「ぬ」と「けり」の項参照

9 「言語・ことばの研究」(エドワード・サピア著・泉井久之助訳)にも「野蛮人の言語では、高度の抽象概念がさほど豊富には表現されていない上に、高度の文化を反映する豊富な用語や、意味のニュアンスの精細な規定も見当らない」(P.19)とある。

10 第六章「上代歌謡をめぐる中国文学との交渉」参照 (P.537)

11 「世界考古学大系2 日本Ⅱ」(近藤義郎著)では、出土品から「弥生中期から後期にかけて、石包丁から鉄鎌へと、収獲具のうえで大きな変化がおこった」との推定を下している。

12 杜甫の詩の中には、この句は見あたらない。

13 「上代日本文学と中国文学」上(小島憲之著)第六章、「万葉集の比較文学的研究」(中西進著)第二章参照

14 「初學記」「藝文類聚」「北堂書鈔」には見られない。

15 これらの「と」は、いずれも甲類の仮名表記によっている。また形容詞「とし」動詞「とぐ」の相違は、接尾語「し」と「ぐ」に基づくものであり、「と」自身は本来同一の意義を担う意義的単位と考えられる。

16 ドイツ語では「利鎌」を表わす Sichel が新月をも表示しており、こういった発想法を知る上に参考となる。

17 「古典と民族学」下(高崎正秀著)の「鶴(くぐいは鳴き声)が白鳥の王者と考えられた。へ中略へ特に候鳥として、季節による移動を繰り返す白鳥類

は、その飛び来り、飛び去る、海の彼岸の常世と一
つになって、禊ぎの神女の物語に、清浄神聖な幻想
を深く投影するに至った。」とあるのが参考となる。

さらに「上代歌謡の研究」(安田喜代門著)にも「白
鳥処女伝説」についての論述が見られる。

・歌謡番号は「日本古典文学大系」「古代歌謡集」に
よる。また用例も同大系によっている。

〔付記〕

本稿は、第五〇回訓点語学会(59年5月 於学士会館)
で発表したものです。

(本学大学院前期課程)